
白百合の記憶

緋水 カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白百合の記憶

【Nコード】

N2765E

【作者名】

緋水 カノン

【あらすじ】

ある幸せな家族に訪れた残酷な出来事。突然現れたドールと名乗る少女は、フローラをどこへ連れて行くのか…。そして、ドールが向かわせる結末とは…。

1st Guilt (前書き)

1st Guilt (罪悪感)

ある小高い丘の頂上、美しい白百合がたった1輪だけ凛々しく咲き誇っていた。

風が吹けば辺りの植物はサラサラとなびき、白百合の美しさを更に引き立たせる。

そんな白百合に近づく人物が1人。

「・・・おまたせっ、私のユリちゃん・・・じゃあ、今日もお願いな？」

その少女はブロンドのロングヘアにブラウンの丸い瞳を持ち、フリルのスカートをはためかせて白百合の前に立つ。まるでフランス人形の様だった。

すると何を思ったか、その白百合の茎をベキリとへし折った。

そして、犬歯を見せる様な獰猛な笑みを浮かべた。

場面は変わり、中世ヨーロッパのような洋館に住む親子の風景。

家族は、いつでも優しい母親と、大黒柱としての暖かな威厳を保つ父親と、その娘のフローラの楽しい光景。

フローラは緩くウェーブのかかった茶色い髪に青い瞳を持つ、穏やかな性格の持ち主だった。

「・・・フローラ、今日はあなたにプレゼントがあるの」

そんな中、丁度夕御飯を食べ終えたフローラに母親が優しく話しかける。

「え、なあに？ お母様？」

フローラは大きな期待を胸に、母親の元へと駆け寄る。

よく見ると母親の手には、少し大きめの、綺麗に包装された箱が抱えられていた。

「ほら、これよ。・・・開けてごらん？」

そう母親が催促すると、フローラは嬉しそうに箱のリボンを解いていく。

「・・・わぁ！！ お母様、これってフランス人形！？ すごく綺麗ね！！」

中から出てきたのは大きさ50cm程の、ブロンドのロングヘアにブラウンの丸い瞳、そしてフリルのスカートが特徴的な美しいフランス人形だった。

顔を綻ばせてそのフランス人形を手にとり、はしゃぎながら一通りの感想を述べたフローラに対し、母親は優しく言葉を返す。

「フツツ・・・今日は、あなたの誕生日でしょう？ だから、あなたの為に用意したのよ。・・・お誕生日おめでとう、フローラ」すると、フローラはその青い瞳を輝かせて母親に抱きついた。

「ありがとうございます、お母様！！」

「ほらほら、そんなにくっ付かないの！・・・あっちにケーキの準備も出来てるわ、行きましょう？」

見ると、テーブルの脇の椅子に、既に父親が腰掛けて待っていた。当然、フローラを見つめる目は優しい。

「フローラ、ほらこっちに来なさい」

その父親に招かれフローラが駆けて行くと、その大きな腕に抱き留められた。

「・・・誕生日おめでとう、フローラ」

そうしてその夜、暖かな家族はしばらく盛大なパーティーを繰り広げ、フローラが疲れた頃にそれぞれの寝室に戻った。

もちろん、フローラはプレゼントのフランス人形を抱いて・・・

そして、フローラを含めた家族全員が寝静まった頃。

起きて

ねえ、起きてよ

「ねえ……起きて……!! 起きてよ、フローラ……!!」

自分のベッドで寝ていたフローラを、何者かが激しく揺り起こす。肩を思い切り揺すられてやっと起きたフローラは、そこにいた人物に寝ぼけ眼で首をかしげる。

「あなたは……誰? どうしてここにいるの?」

そこにいたのは、丸いブラウンの瞳を持ちブロンドのロングヘアを揺らす少女。

まるで、今日フローラがプレゼントに貰ったフランス人形のように

「私っ! 私よ、フローラ! ドール……あなたの人形、ドールよ!」

「ド、ドール……? え……? どうしたの? 何かあったの?」

「いいから早く! 早く逃げないと殺されちゃう!」

「え……ええ!?! 何で!?! ……お父様は? お母様は!?!」

一緒に逃げなきゃ!」

フローラは完全に目が覚めたのが、寝巻きのままベッドから飛び降り、ドールと名乗る少女の横をすり抜けてドアへと向かう。

「ダメ! ダメよフローラ! もう間に合わない!」

そう言っただけでドールはフローラの手首を掴んで引き止め、急いで庭へと繋がる窓を開ける。

「何? 何が起こっているの!? ねえドール!」

「今は説明する時間なんてないわ! 早く出るわよ!」

「嫌!!! ここ2階……あれ?」

フローラはドールの手を振り払って窓から離れるが、そこから広がる風景を見てピタリと動作を止めた。

フローラがその窓から見る景色とはまるで違っていたのだ。

夜なら遠くの家の明かりが届き、庭の草花が揺れるはずなのだが、今の景色はまるでどこかの廃墟のような雰囲気を出していた。

赤く錆びた鉄筋が斜めに倒れかかっていたり、暗くてよくは見えないが濁ったような水が滴っていたり・・・奥に行けば行くほど、真っ暗な闇が広がっていた。

「ど、どこ・・・？」

「速く！ 逃げ場はここしかないの！」

ドールはそう言っただけで窓の外へとフローラを追いやると同時に自分も急いで窓を越える。

「嫌！ お父様とお母様が・・・！！」

「離れて！ 閉めるわよ！」

「ヤダッ・・・ヤダァ　　！！」

フローラは絶望に声を上げるが、ドールは何も聞かずに窓を外から思い切り閉める。と同時に・・・。

『ヴオオオオオオオオ！！』

「きゃッ！」

閉めた窓の中から地を割るような、何かが呻くような叫び声が大きく鳴り響く。

それに小さく悲鳴を上げるフローラの手を引っ張って行くドールは、ズンズンと廃墟の中へと足を進めていった。

怖い。

助けて。誰か助けて。

フローラは裸足で腐敗した鉄や濁った水溜まりを、ドールに手を引かれながら走り抜ける。

母親や父親を見捨てた罪悪感よりも今自分を犯している恐怖心に
抗えないフローラは、暗い廃墟の中を当てもなく彷徨っていく。

やがて、ドールの足がとあるドアの前で止まった。

2nd Despair and scream(前書)

2nd Despair and scream(絶望、そして悲鳴)

2nd Despair and scream

そのドアはその辺のものと同じく腐敗していて、少しでも衝撃を与えればもろく崩れてしましまいそうだった。

「・・・行くの？」

息が上がったフローラが、未だ前に立ってその手を掴むドールに話し掛ける。

「ここしか逃げ場はないのよ、行くしかないわ」

欠片も戸惑う様子を見せないドール。

何故だろう。

フローラにはそれが安心できるような、警戒するような雰囲気を感じ出していた。

本当に付いて行ってもいいのだろうか。

自分はそのドールと名乗る少女を、信用できるのだろうか。

『・・・ガチャツ・・・ギギイ・・・』

フローラがそうこう考えているうちに、ドールは腐敗したそのドアを開けていた。

やはり錆びていた為だろう、ドアは不快な音を響かせながらゆっくりと開いた。

「・・・行こう」

そう言っただけでドールはフローラを引っ張る。

奥は真っ暗で何も見えなかったが、腐った水溜りが増え、より深くなった事を悟る。

それでも恐怖に刈られて奥へ奥へと進んで行けば、先程までの錆びやかびの匂いも一層濃くなり、鉄臭さも混じる。

「やだ・・・これ、何の匂いなの・・・!!?」

フローラは自分の頭の中にある答えを、ドールに否定して欲しかった。

(血・・・!?!? これは血の匂いなの・・・!!?!?)

「……奴等が……人間を喰い散らかしていった痕なのかも知れない……。ほら、見て？　ここの水溜り、全部血だよ……」

掌で口元を抑え、ドールは足元の水溜りをピチャンツと音を鳴らして踏む。

その瞬間、鉄の匂いが濃くなる。

よく見れば、暗い闇の向こうで人のようなものも見える。

もう動く気配もない、人の、肉の塊。

「やだ……助けて……！！　こんなの嫌だよお！！」

「ダメツ、フローラ、静かに……！！」

「ヴオオ……ヴオオオオオオオオオオ！！　オオオオオオ
！！」

聞き覚えのある鳴き声が先程よりも大きく、近いところで聞こえる。

「……！　追いつかれたわ、フローラ！！　速く走ってえ！！」

そしてまた、行く当てもなくただただ走る。

恐怖。

恐怖。

鳴き声の主の足音は聞こえないが、そいつが確かに追ってきているという確信。

段々と上がっていく、フローラとドールの息。

「……キヤアアア　！！」

不意に響く、悲鳴。

「ドール！？　ドール！！？　イヤア　！！」

前を走っていたドールの脚に絡んだのは、真っ赤な血の絡んだ太い触手。闇の中に引きずり込もうと、ズルズルとドールの体を引きずる。

ドールは涙でボロボロになった顔で叫び、必死にフローラを呼びながら手を伸ばす。

助ケテ。

助ケテ。

必死に助けを求めるドールの手を掴み、フローラは渾身の力を込めて引つ張る。だが闇の奥に紛れる奴には到底力で勝てるはずもなく、無慈悲にもドールの体は奥へ奥へと引き摺られていく。

「助けてっ、助けてフローラあ！！ いやっ・・・死にたくないよ
おお・・・！！！」

必死にフローラの腕にしがみつくドールの力は強い。それも、生への執着だろう。

だが、フローラの腕ももう限界だった。

「もう・・・無理っ・・・！！！」

痛い。

痛い。

遂に、ドールの手を振り解いてしまったフローラ。

それが、フローラの生への執着の形だったのだろう。

絶望を湛えた顔で、血に塗れた触手に引き摺られていくドール。

見捨ててしまったフローラに後から来るのは、言い知れぬ罪悪感だけだった。

「ドールっ、ドール！！・・・ごめん、なさい・・・！！！」

フローラはボロボロと涙を流しながら、ドールが引き摺られて行

つただらろっ血の痕を見つめ、今はもう届かない謝罪の言葉を深い闇
に向かって呟く。

「……フロー……ラ……?」

不意に響く、愛しい人の声。

「……お……お母様……!? お母様なの……
!?!」

3rd The slaughter still continues)

3rd The slaughter still continues)
nues (殺戮はまだ続く)

「・・・フ・・・ロー・・・ラ・・・」

振り返ると、闇の中にうつすらと見える白い、血の色が絡んだ足。近付いてよく見れば、それはフローラの見知った顔。

「お母様！！ 生きていたのね！？ 良かった、良かった・・・」

絶望と恐怖の中で一人でいたフローラには、今は人の温もりが恋しい。それが自分の母親のものなら尚更だ。

フローラはタタタツと駆け寄り、母親にギュツと抱き付く。

だが、なぜか抱きしめたその体は冷たく異常に細い。

不審に思っつてその手を緩めてふと見上げれば、焦点の合っていない瞳、ガタガタと振るえながら低い音で呻く唇、全く血の気がなく青白い肌、体や服に絡んだ赤い色。

元の姿形は同じでも、それはいつもの母親ではなかった。

フローラはサツと青ざめて力いっぱい母親を突き飛ばし、急いで後ろを向いて駆け出す。

『ドンッ』

だがその先にも何かがあったのか、ぶつかったフローラは急いで見上げ、小さく悲鳴を漏らす。

「フロー・・・ラ・・・母さん、と・・・探したぞお・・・」

そう言っつてゆらりと体を揺らしながら手を伸ばすのは、紛れもないフローラの、元、父親。

「いつ・・・イヤッ！ 助けてえ！！」

父親の伸ばす手を振り払い、フローラはまたも迫り来る母親の影の隙間を通り抜けて逃げる。

「・・・だめよお、フローラ・・・貴女は私達を見捨てたの・・・だから・・・私たちが、捕まえてあげる・・・！」

「！」

走って逃げるフローラの後を、両手両足を地面につけて追いかけて来る母親と父親。

信じたくはない、これが自分の両親だとは。

目尻に涙を浮かべ、必死に赤い水溜りを踏み付けながら走る、フローラ。そんなフローラの視界に、彼方から届いていうである光が見えた。

早く、あそこまで逃げなくちゃ!! 早くっ・・・出口にっ!!

走る。

走る。

そして、やっと見えてきた出口。

「つつ・・・着いた!! ・・・え・・・!!?」

フローラは光の方へと走り、ようやく辿り着く。

だが、着いた先には、ボロボロになったドールの姿。

「・・・遅かったねえ、フローラぁ・・・。・・・なんで、私を見捨てたの・・・?」

光の中のドールの、ボロボロになった姿はまるで異空間にいるような感覚を思わせ、フローラはブルリと身震いした。

ドールは、『何か』に捕まったはずだ。何故、此处にいうのだろうか。

そんな考えが、フローラの頭をよぎる。だが、そんな考えもすぐに中断された。ドールの手で。

いつの間にかフローラの首にまわされた、ドールの白い手。

「・・・っ!! ・・・かっ・・・!!」

息が詰まる。苦しい。

あの白く細い腕の、どこにこんな強い力があつたのだろう。

段々と遠のいていく意識。

ああ・・・私が、皆を見捨てたせいなんだ・・・

「・・・フツツ　これでまた名前が増えたね、ユリちゃん」

『私が殺した死者への、せめてもの饞』

そう言っつて、ドールがまだマトモな理性を持っていたときに植えた白百合はドールの手によって折られた。

不意に、その白百合を持ったドールが丘の上へと走ってくる。

その表情は、空が晴れ渡る程の笑顔。

ドールは丘の上の元は白百合が咲いていた場所を唐突に探り出し、ふと手ごたえを感じて引つ張る。すると大きな蓋のようなものが持ち上がり、パラパラと土を落としながら横に退かされる。

出てきたのは、大きな棺桶。その蓋には、軽く数十人は超える人の名前が載っている。

「ンフフ」

棺桶の蓋を開けながら、ドールは妖しげな笑みを浮かべている。

中に収まっている死体の、一番上にあるそれはフローラだった。

厳密に言えば、元はフローラの体だったその肉塊。それはその棺桶の中では真新しい。

ドールはそれを満足げに眺めてから、ゆっくりと蓋を閉める。

その蓋の一番下には、フローラの名前が刻まれていた。

その頃、フローラの家の中では。

『ガタンッ』

「キヤツ！ ……え、何？ ……ねえあなた、今の音はなんなの……？ まさか……」

夜の家で話をしていたフローラの母親と父親は、突然聞こえた物音に過敏に反応する。

「フローラの部屋からだ。 ……少し、様子を見に行ってみよう。」

「一日で効果が出るとは限らんぞ」

「……そうね」

二人は不穏な会話をしながらフローラの部屋の戸をそつと開ける。

「！！ あ、あなた、あれ！！」

「なつ、なんだアレは！？ ……話は、本当だったのか……」

「！！！」

そう言う二人が部屋で見たもの。

ベッドに横たわるフローラの首にかけられた、フランス人形の手。既に息をしていないフローラの顔は真つ青で目は見開かれ、その首には自分の喉を掻きまじった痕がある。

まともな人間が見れるものではない。

「あの話は……呪いは本当だったんだわ！！ ……ああ、これでやっと、あんな娘を気にする事なくいつまでもあなたと二人でいられるわ……」

母親はフローラの死に顔を尻目に、父親の腕に自分のそれを絡める。

「ああ……。この人形に感謝しなきゃな、せつかく高くで買い取ってきたんだたらな」

父親もそつと母親を抱きしめ、唇を重ねる。

「いやよ、あんな不気味な人形。用は済んだんだから、さつさと捨てちゃいませよ」

「何を言ってるんだ、呪われるかもしれないんだぞ？」

二人は戯れを続けながら、またもフランス人形を見やる。

だが、それは何かが違っていた。

そう、ベッドでフローラの首を締めていたはずのフランス人形が、

いつの間にか移動して、二人の足元に。

それを動かした覚えのない二人は、抱き合った姿勢のままその動きを止める。

「・・・ねえ、アレ・・・」

「あ・・・ああ・・・！！ まさかつ・・・！！」

「！？ あつ、あなたどうしたの!？」

「まさかつ・・・あの呪いの人形は・・・っ!!」

『俺達をも殺すつもりなのか?』

恐怖で、声を言葉に出来ない。

ガクリと膝から床に崩れ落ちる父親。母親は床に手を付く父親に驚いてその肩に手を添え、何事かと声を掛ける。

「どうしたの!？ 何があつたつていう・・・っやだ、何よこれ・・・!？」

母親が目を離れた瞬間に、いつの間にかすぐ隣に移動していた人形。

その瞳は、無表情で二人のジツと見ている。

「いやっ・・・こつちに来ないでよおっ!! なんなのよ!!」

余りの恐怖に、語尾を震わせている。父親は、とくに気を失ってグツタリとい母親に凭れ掛つていた。

『ギツ・・・ギギギツ・・・ギツ』

鈍い音をたてて、人形の手がぎこちなく動き出す。そして、不意に響く声のような音。

「・・・して・・・る・・・」

「あ・・・ああ・・・!! いや・・・ごめんなさい、許して・・・!!」

ボロボロと涙を零しながら懇願する。

だが、近付いてくる人形の足は止まらない。

ヒタリ、ヒタリ・・・その足音は、母親のすぐ目の前で止まった。

「・・・殺してあげる・・・」

「・・・!!」

ニタリ、と歪んだ笑み。手はまっすぐ母親の首へ。

次の日。

フローラの家の前には、何台かのパトカーが並んでいた。運び出される、親子3人の死体。

「昨夜未明、・・・家の家族一家が何者かによって殺害されました。調べた結果、殺害された者には、それぞれ首を締められた痕があったとの事です。また詳細がわかり次第、追って速報を・・・」

ビデオカメラを回す者もいた。

家の周辺は、野次馬でごった返していた。

その近く、家の影に、1人の少女がポツリと立っていた。

ブロンドのロングヘアにブラウンの丸い瞳を持ち、フリルのスカートが特徴的な、可愛い少女だった。

そう、見た目はまるで、あのフランス人形のように・・・。

少女はクスリと笑みを浮かべると、ほんのりと頬を赤く染めて、楽しげに呟いた。

「フフツ・・・次は、誰と遊ぼうかなあ・・・」

殺した人間の数知れず。

ドールの殺戮^{あそび}はまだ続く

・
・
・
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2765e/>

白百合の記憶

2010年10月8日15時31分発行